

第4回「釧路湿原川レンジャー学習会」が開催されました

平成23年2月21日(月)に、20名が参加して「第4回釧路湿原川レンジャー学習会」を開催。

今回は「ハンノキ林調査(茅沼地区)と自然再生事業(久著呂川)の現場見学」を実施しました。

自然再生事業(茅沼地区旧川復元)の効果について

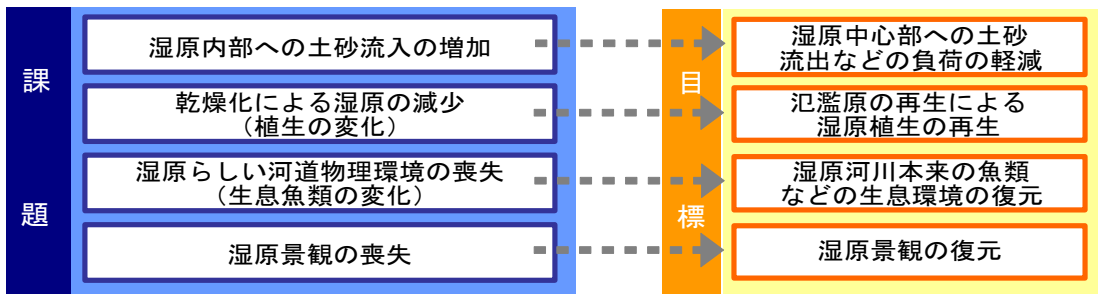
地域の開発と発展要請と相まって、釧路川茅沼地区においても1980年に河道が直線化され、旧川周辺は乾燥化し、牧草地として土地利用されてきました。それによって茅沼地区は、直線化に伴う河川水位や地下水位の低下、氾濫頻度の減少が生じています。その結果、4つの課題と目標を設定して事業を実施しています。



位置図

目標の達成により
湿原の・質的変化※
・量的変化※
を緩和することができます。

※質的変化: 湿原植生の変化
量的変化: 湿原面積の変化

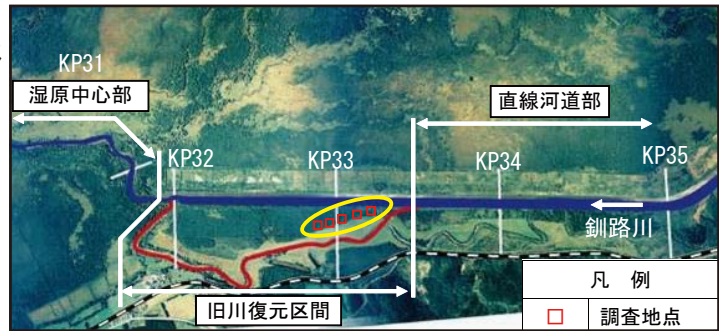


ハンノキ林の調査について

この調査は、ハンノキの生育状況を把握し、ハンノキ林の長期的な変化を把握するために行いました。調査は、北海道教育大学釧路校の神田教授及び学生と共同で行い、5班に分かれて、旧川復元区間沿いに1地点あたり10本について計200本の調査を行いました。樹高及び地上から1.3m(胸のあたり)の周囲長、根元から生える萌芽本数を計測しました。

今回指導して下さった神田教授からは、「ハンノキ林の衰退など工事後の効果を把握するためにも継続して調査することが必要であり、その調査を地元の方々に行ってもらえれば、成果も実感できる」と、お話しがありました。

また、参加者からは、次のような感想がありました。
○長い目でモニタリングしなければ結果がわからないので、孫の代に引き継いでいかなければと思った。
○冬の状態を直接感じる事ができた。
○樹高が高く何度も測高ポールを伸縮させたので、とても疲れた。



事業説明図



調査に参加した釧路湿原川レンジャー



神田教授による説明



調査したハンノキ林

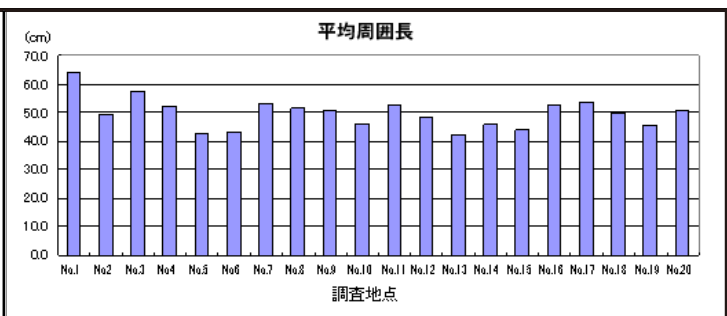
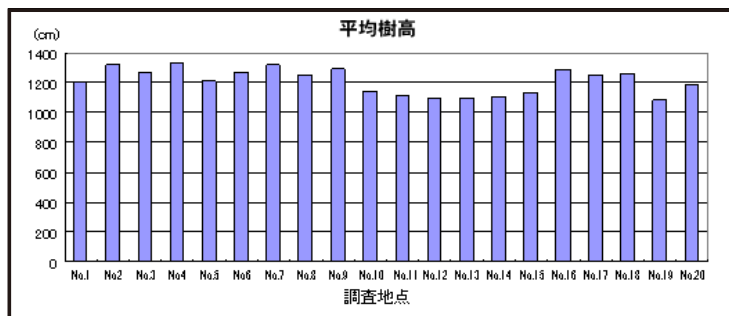


樹高の計測



幹の周囲長計測

ハンノキ林の調査結果



調査した結果、地点毎の平均樹高は1,084~1,328cmで、各調査地点で大きな差は見られませんでした。また、平均周囲長は、42.1~63.7cmで、上流側の調査地点で太い傾向が見られました。なお、萌芽本数は、20地点中7地点で1~3本確認されました。「萌芽」は、土壌中の水分量が多い場合に生えてくるもので、萌芽本数が多くなります。

新聞に掲載されました！！

茅沼地区のハンノキ林調査で、川レンジャーの活動が新聞に掲載されました。また、この他にも読売新聞や北海道新聞に掲載され、NHKの「ネットワークニュース北海道」でも紹介されました。

自然再生事業（久著呂川）の現場見学について

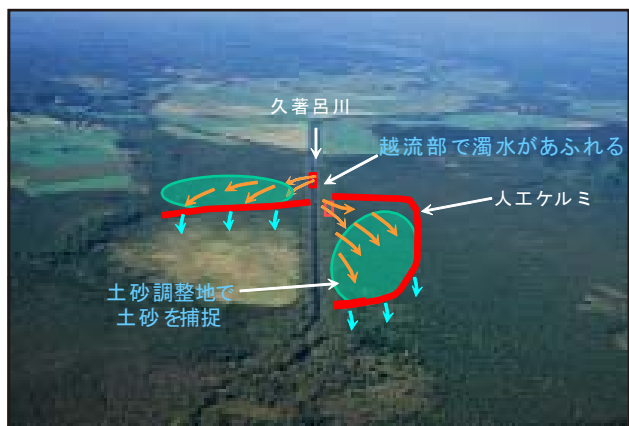
午後からは、自然再生事業を行っている久著呂川の現場見学を行いました。久著呂川では、流域全体で湿原へ流入する土砂を抑制して、湿原生態系の保全・再生を図っています。

今回は、釧路開発建設部が実施している湿原流入部土砂調整地を見学しました。土砂を捕捉するしくみは、久著呂川から濁った水が土砂調整地に流れ込み、人工ケルミ※で囲むことによって濁った水を調整地内に溜めます。これによって細かい土砂を捕捉して、湿原中心部へ土砂が入らないようにしています。

この他にも久著呂川では、上流部で森林を再生させたり、中流部では河床が掘れて土砂が流出しないように護岸を設置したり、また、農地からの排水路に沈砂池を整備して土砂を捕捉するなど、流域全体で取り組んでいます。

このような土砂流入対策により、久著呂川の流域全体で湿原に流入する土砂を約4割軽減することができます。

※棚田状の湛水域を創出するために設置する畦(あぜ)状の高まり。「ケルミ」はフィンランド語。



土砂調整地のイメージ



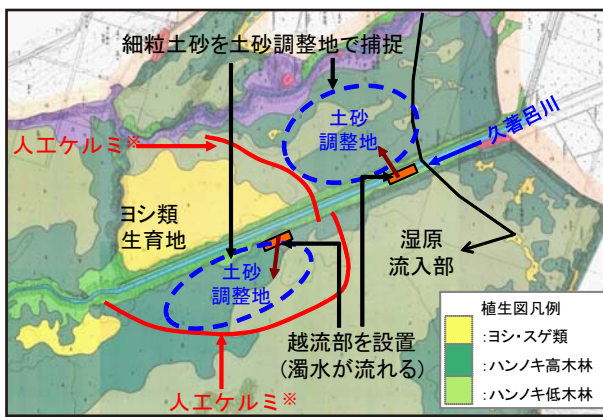
説明を聞く参加者



人工ケルミ (平成22年8月)

釧路湿原川 湿原回復の判断に 釧路開建

一般的ハンノキ林も、平均して樹高は5m、5cmの幹線化がみられた。ハンノキ林の再生は、土砂の流入を抑制する必要がある。調整地を整備して濁った水を調整地内に溜め、細かい土砂を捕捉する。このようにして、湿原中心部へ土砂が入らないようにしている。



土砂調整地事業説明図